号外 MEG WEST Mixture Entertainment Guide Special Edision

紅ゆずる／水田航生／松井愛莉
平井まさあき（男性ブランコ）／浦井のりひろ（男性ブランコ）／山崎真実／桜庭大翔／梅澤裕介（梅棒）／大路恵美／腹筋善之介／中村まこと／後藤ひろひと／波岡一喜
丹下真寿美（T-works）／大西ユースケ／天知翔太（無名劇団）／中尾多福（幻灯劇場）／平松美紅

2026 1月9日（金）～18日（日）　前売・当日共【税込・全席指定】7,000円　梅田芸術劇場 シアター・ドラマシティ 〒530-0013 大阪市北区茶屋町19-1

チケット購入はこちら

主催：大阪府・大阪市・大阪文化芸術事業実行委員会［事業に関するお問合せ］大阪文化芸術事業運営事務局 ☎06-7177-6938（12/29-1/3を除く、平日10:00～17:00）［MAIL］info@oica-project.jp

大阪国際文化芸術プロジェクト

姫が愛したダニ小僧 ～Princess and Danny Boy～ 稽古場潜入レポート Rehearsal Room Report

豪華で個性的なキャストが集結！名作ファンタジーの笑いに包まれた初日舞台稽古をレポート！

大阪の劇作家・後藤ひろひとの『姫が愛したダニ小僧』リバイバル上演に集まったのは、元宝塚トップスター、芸人、大阪の小劇場俳優といった多岐にわたる異色のキャスト陣だ。初日の稽古は、本読みをメインに進行。後藤氏は開口一番、「基本アホアホな話なんで」と軽快に切り出し、「丸をあんまり意識しないで、丸を点ぐらいだと思って」と、作品の持つ独特のテンポ感をキャスト全員に共有。スピード感あふれる舞台を目指す姿勢を打ち出した。合間にはキャスト全員が、精巧に組み立てられた舞台模型を囲むシーンも登場。セットの構造を確認し、自分たちの演技で作り上げていく「ファンタジーの世界」の全貌を初めて立体的に捉える瞬間となった。水田航生（祐一役）と松井愛莉（エリ役）の夫婦役については、後藤氏から「男女の典型的なギャップ」を見せたいと指示があり、物語の核となる旅の道行きの基盤が築かれていく。本読みが進んでいくと、あちこちで笑いが噴出。後藤作品の持つ「笑えるシーンと感動シーンの落差」が浮き彫りになっていった。稽古場は「雰囲気が柔らかく、何でも試せる環境」という印象で、紅ゆずる（すみれ姫／老婆役）の、年齢差のある役柄の演じ分けが早くも共演者の注目を集めていた。笑いと人生の真実が詰まった後藤ひろひと流ファンタジーが、どのような形で結実するのか。本番に向けた稽古場の熱量はさらにこれから上がっていきそうだ。

Cast Comments（出演者コメント）

祐一役

水田航生 Kouki Mizuta

年明け一発目の地元、大阪での公演で、笑えて心が温かくなる物語を届けられるのが嬉しいです。お笑いに厳しい大阪のお客さまに笑っていただけるよう頑張ります。僕が演じる祐一は、空想を受け入れられない現実主義者。目の前のことにただ反応していく様から生まれる面白さを突き詰めていきたいです。初めましての方が多く、異種格闘技戦みたいな感覚もあって。キャスト陣との“化学反応”もご期待ください！

エリ役

松井愛莉 Airi Matsui

舞台は2回目となりますが、皆さんに必死に食らいついていきたいと思います。エリは夫の祐一とは対照的なプラス思考で、物語を引っ張っていく役どころ。観客の皆さんをファンタジーの世界へとお連れするために、まずは私自身が心からこの作品とエリを演じることを楽しみたいです。個性豊かな役者さんたちに囲まれて、皆さんとの想像を超えた掛け合いが起こるのではと今からとてもワクワクしています！

豚女役

山崎真実 MamiYamasaki

後半から一気に物語を動かしていく役です。演出の後藤さんからは「どんどん暴れてください」とアドバイスをいただいたので、ストーリーの印象を変える”飛び道具”的な存在として、思いっきり暴れまくります。ファンタジーの面白さの中に、老人介護ホームの現実といった今の日本が抱える重要なテーマも織り込まれた作品。笑って、時にはズキッとしながら、何かを感じていただけたら嬉しいです！

アンサンブル キャスト

大阪で活躍する若手俳優もアンサンブルキャストとして活躍！

天知翔太（無名劇団） Shota Amachi

芸人さんや宝塚出身者など多彩なメンバーとの共演は、違う畑の表現を吸収できる貴重な機会で今から楽しみです。その中でも関西小劇場出身として、しっかり期待に応えたいと思っています。稽古場の柔らかい雰囲気の中、この作品は「楽しんだもん勝ち」だと感じました。アンサンブルとして役割をしっかり担い、お客さんの心に印象を残しつつ、芝居全体を膨らませていけるよう貢献したいです。

大西ユースケ Yusuke Onishi

アンサンブルとして、どんな急な役の追加にも柔軟に対応できるよう幅広く準備中です。ファンタジーな物語で、役柄が人間だけではないというのも楽しみの一つ。本番では「あの人がこんな役をやっている！」という驚きを提供したいですね。口コミで「面白い！」と評判が上がっていくような作品にしたいと意気込んでいます。

©Interview&Text／矢本祥子

CAST

紅ゆずる／水田航生／松井愛莉／平井まさあき（男性ブランコ）／浦井のりひろ（男性ブランコ）／山崎真実／桜庭大翔
梅澤裕介（梅棒）／丹下真寿美（T-works）／大路恵美／腹筋善之介／中村まこと／後藤ひろひと／波岡一喜
大西ユースケ／天知翔太（無名劇団）／中尾多福（幻灯劇場）／平松美紅

2026 1月9日（金）～18日（日）
［会場］梅田芸術劇場シアター・ドラマシティ ［料金］税込7,000円（前売当日共・全席指定）

プレイガイド ● チケットぴあ［Pコード:537-297］ ● ローソンチケット［Lコード:53046］ ● e+（イープラス） ● FANYチケット ● CNプレイガイド

1月	9(金)	10(土)	11(日)	12(月・祝)	13(火)	14(水)	15(木)	16(金)	17(土)	18(日)
12:00	-	●	●	●	-	休演日	-	-	●	●
17:00	-	●	●	-	-		-	-	●	-
19:00	●	-	-	-	●		●	●	-	-

公演に関するお問合せ　FANYチケット問合せダイヤル ☎0570-550-100（受付時間10:00～19:00）

「ただのお姫様では終わらせません！」もう一度観たくなる舞台を目指して

2019年に宝塚歌劇団を卒業後、多くの舞台で活躍中の紅ゆずる。後藤ひろひと作・演出の名作に再びタッグを組んでの主演で、今回演じるのは初となるおばあさん役とお姫様役。自らを「おもしろいこと大好きなコテコテの大阪人」と言う彼女の新たな挑戦、その意気込みを語ってくれた。

Yuzuru Kurenai
紅ゆずる SPECIAL INTERVIEW

── 「FOLKER」に続き後藤さんと2回目のタッグ。後藤作品の印象を教えてください。

「FOLKER」はめちゃくちゃ楽しかったです。後藤さんの作品は、緻密に計算されているように見えない緻密さがいいですよね。今回の公演は、きっとお正月ボケしてる時だから、すんなり入ってくる感じがいいなぁというのと、最終的にほっこりするし。お客様がご観劇後に、もしかしてこうだった?とか考える余白のある演劇って、2度おいしいと思うんですよ。もう一回観てみたいと思っていただける作品だなと。私はそこが好きです。

── 物語は、老人介護ホームで“すみれ姫”と名乗る老婆が、昔恋した笛吹きを探す旅に出ると言い、巻き込まれた人たちがいつしか不思議な世界へ…というファンタジーです。

私、ファンタジーものが大好きなんです。おばあちゃんから始まって、最終的にはお姫様に変身して。でも、ファンタジー過ぎず現実的な部分とファンタジーが混じってる。フィクションの中に真実があるから、お客様も感動できるし、役者もやりがいがあるなと。おばあさん役は初めてです。「FOLKER」では死刑囚の役でした。飛び切りきれいなお姫様、みたいな役は意外と興味なくて。私はその人間ドラマに惹かれるので、振り幅のある役をなんでもやってみたい。宝塚の元トップスターがやる役という型にはまりたくないんですよ。新しいことにいろいろ挑戦していきたいと思っています。

── 紅さんが舞台で大切にされていることはなんですか?

その時初めての場所で初めて相手としゃべるという、新鮮さを常に求めています。そして観てくださる方が共感できる、大多数のお客様の心に響くお芝居をしたい。お客様に「あの舞台、もう一回観てみたい」と思っていただける、なるべく多くの作品を皆様の心に焼き付けたいという願望があります。

── 注目してほしいところ、そして皆様へのメッセージをお願いします。

「こいつは何かやるぞ」と思って観に来てください。初演をご覧になっている方も、私が調理したらどんなことになるか注目してほしいです。そんな気持ちで来ていただけると、こちらも闘争心が沸きます(笑)。実は大晦日の東京の舞台でもお姫様を演じるんですよ。でも私、基本的にただのお姫様で終わらせるつもりはないので。舞台を観て自分と照らし合わせることができたり、私生活にプラスになる情報を感じられることがきっとあると思います。その芝居から何かを受け取ってやろうというぐらいの気迫をもって観に来ていただけると、よりおもしろくなるんじゃないかな。大阪のお客様は既にお分かりでしょうが、今回は東京の方や地方からも来られると思うので、その大阪のお客様を筆頭に「楽しむぞ！」という気持ちで来ていただけると、より楽しんでいただけると思いますよ。

©Interview&Text／高橋晴代

波岡一喜
Kazuki Namioka Special Interview

「面白いもん勝ちの戦いになる」そんな可能性がある舞台

映像、舞台と八面六臂の活躍で、悪役から芸人まで幅広い役柄で確かな存在感を放つバイプレイヤー・波岡一喜。すみれ姫と共にダニ小僧探しの旅に出る無敵の剣豪・橋本ゆうじ君を演じます。“無敵の剣豪”の名に違わぬ立ち回りも披露、「美しさ勝負で見せたい」と意気込みます。

── 後藤ひろひとさんの作品には、初出演だそうですね。

はい、今回が“初めまして”です。後藤さんは僕が昔、舞台をやっていた時からレジェンドです。この『姫が愛したダニ小僧』は、ストーリーはもちろんですが、演者のマンパワーありきの作品なのかなと思っています。過去のキャストも、役者さんの色が強く出ていますよね。

── そういう作品に出られるというのは、どんなお気持ちですか?

怖いですよ。面白いもん勝ちの戦いになるから、難しいですよね。今回は男性ブランコの二人もいますしね。作品にも、出演者の皆さんにも、恐怖におののいています(笑)。

── 波岡さんは「無敵の剣豪」という橋本ゆうじ君を演じられます。

後藤さんからは「橋本ゆうじ君は刀を抜くと表現が変わる」みたいなことは聞きました。立ち回りもありますし、体力はすごく使いそうですよね。今、舞台『じゃりン子チエ』のテツ役を演じるため、15キロくらいウェイトが増えているのですが、『姫が愛したダニ小僧』に向けて、また体重を落とします。本番を迎えるころには体も軽くなっていると思います。

── 立ち回りの極意や美学はありますか?

立ち回りは山ほど戦ってきていますが、極意と言えるほどのものがあるかどうか…。立ち回りの基本は腰の位置ですね。どれだけ低く落とせるか。構え方は役それぞれだと思いますが、基本的な刀の持ち方や構え方は習うので、それをどうアレンジしていくか。舞台は美しさ勝負なので、足さばき、体さばき、刀の軌道、そのあたりを意識して取り組みたいと思います。

── 2025年は4作品の舞台に出演されましたが、舞台に対してのスタンスが何か変わったのでしょうか?

コロナ禍以前は、3年に1本くらいのペースやったんですよ。あんまり舞台をやらないと決めていて。でも、コロナ禍を経て、ちょっとスタンスを変えてみようかなと思って。僕は25歳までは舞台しかやっていなかったので、原点回帰じゃないですけど、またやっていこうかなと、なんとなく思うようになりました。そしたら、いつの間にか今年は4本、やっていました。

── 2026年の最初の舞台が『姫が愛したダニ小僧』。この作品で新しい1年を始めることについての思いを聞かせてください。

まずは後藤さんや紅ゆずるさん、腹筋善之介さんなど、出演者の皆さんと仲良くできるように。あとは、一つひとつ目の前のことをクリアしていく。そして健康ですね。舞台は健康じゃなきゃ幕が開かないですから。とにかく健康でいること。これは人類共通の願いですよね。

── この作品には「コインを入れたら何でも願いがかなう自動販売機」が登場します。波岡さんが今、かなえたいお願い事はなんですか?

僕の近しい人とか、周りの人が、みんな健康になってほしい。さっきの話の続きになりますが、それに尽きますね。ああ、でもなあ、物価が下がってほしいし、給料も上がってほしいし…俺、いっぱいコイン入れなあかんわ(笑)。

©Interview&Text／岩本和子

大阪国際文化芸術プロジェクト

姫が愛したダニ小僧 ～Princess and Danny Boy～

人物相関図

STORY ついていない人生に絶望したサラリーマン・飯田（浦井のりひろ）は、自殺しようと廃墟ビルに登るが、そこには支離滅裂な言動を繰り返すホームレスの男A（後藤ひろひと）が住んでいた。2人は生と死をめぐる奇妙な対話を始める。

一方、老人介護ホームでは、祖母の遺品を受け取りに来た祐一（水田航生）と妻エリ（松井愛莉）が、国王の娘すみれ姫だと名乗る老婆（紅ゆずる）と出会う。姫はふたりをかつての家来だと思い込み、「さぁ船長、洗濯娘、私をここから連れ出して！またダニ小僧を探す旅に連れてって！」と懇願。こうして3人はホームを抜け出し、夫婦は認知症老人の妄想と思われる冒険に巻き込まれる。

だが、このホームは鯖田（中村まこと）が詐欺と虐待を続ける悪徳施設で、内部告発を恐れた鯖田は、職員の渡辺（梅澤裕介）とみゆき（大路恵美）、さらに裏仕事のプロ・ねじ武史（平井まさあき）に3人の追跡を命じる。

旅の途中、姫の語るおとぎ話が現実と重なり、剣士・城一郎（桜庭大翔）、無敵の剣豪・橋本ゆうじ君（波岡一喜）、女海賊・豚女（山崎真実）とその子分のミミズ娘（丹下真寿美）、乗ることのできない馬と、“かつての家来”が次々と姿を現す。姫は精霊の力で若返り、彼女を密かに想っていた老人・米村（腹筋善之介）も若返り、アイアンフット米村となる。やがて一行は願いが叶う妖怪丘の自動販売機に辿り着くが、鯖田と戦士と化した渡辺、妖術使いとなったみゆきが立ちはだかり、最後の戦いが始まる。

後藤ひろひと Hirohito Goto SPECIAL INTERVIEW
上質なエンターテインメントを大阪から世界に発信します!

大阪単独公演でありながら、2025年2月全国的に大きな話題を呼んだ「FOLKER」。主演の紅ゆずると、作・演出の後藤ひろひとの最強タッグが、手練れの役者陣と共に、後藤による不朽の名作「姫が愛したダニ小僧」を上演する。後藤にとって特別な思いのある今作を新たな演出で挑む。

── 「姫が愛したダニ小僧」は後藤さんにとって大切な作品だということですが、今回、新たなキャストでのこの作品の再演を決意された理由をお聞かせください。

初演は1998年。“さよなら大阪球場”のプログラムの一環として、野外劇として執筆した思い入れの深い作品です。そして2005年の再演ではユースケ・サンタマリアさんや富田靖子さんとの共演も話題になった作品です。あれから平成、令和と、どんどん大阪は様変わりしていきました。価値観もずいぶん変わっていく今の時代に、なにか通じるものがあるんじゃないかと思っています。大阪国際文化芸術プロジェクトの演劇公演「FOLKER」でご一緒した元宝塚歌劇団のトップスター、紅ゆずるさんと再度ご一緒できるとのことで、この脚本を提案させて頂きました。

── 「FOLKER」では紅ゆずるさんの演技が高く評価されましたが、元宝塚歌劇団のトップスターを後藤ひろひとワールドに引き込む際のご苦労などは何があったのでしょうか?

紅さんは10代の頃から宝塚で鍛え抜かれて、演技の基礎が完璧な役者さんなので、とにかくすべての所作が美しいんです。姿勢はもちろん、手や脚の伸びも、とにかく美しい。でも僕の作品では、コミカルな演出や、わざとヘタでぎこちない演技を求める場面があるので、最初は紅さんも相当悩まれたんじゃないかと思いますが、見事に演出の意図を汲んで好演してくださった。さすが、宝塚の元トップスターだと感心しました。

── 今作では紅さんのほかにも豪華なキャスト陣ですが、演出として期待したい部分はどんなところでしょうか?

今作の豪華なキャストの皆さんが、作品がどう動かしていってくれるのか今から楽しみは尽きないです。中でも波岡一喜さんの参加が楽しみです。無敵の剣豪、橋本ゆうじ君というトボけた一面と、ちょっとカッコイイ二枚目という変わったキャラクターをどう演じてくれるのか、めちゃくちゃ楽しみにしています。また腹筋善之介さん、大路恵美さんという昔から一緒にやってきた役者さんが側に居てくださるのも心強く感じています。

── 豪華なキャスト陣と共に、今作では大阪で活躍中の小劇場の役者さんも多く参加されるとのことですが、その意図についてお聞かせください?

僕が山形から進学で大阪に来て、37年が経ちました。もうすっかりノリは大阪に同化したと思っています。僕たちが演劇を始めた頃の同世代たちが元気なうちに、昭和の大阪小演劇の匂い、痕跡を残しておきたいという思いからです。当時の僕たちは小劇場の活動で世間の評価を得て、関西の深夜番組やラジオ番組にステップアップして、有名になって東京進出という、大先輩のいのうえひでのりさんや古田新太さん（劇団☆新感線）、生瀬勝久さん（元劇団そとばこまち）が目標だった時代もありました。今はそういう憧れや目標となる演劇人が大阪に少なくなったんじゃないかと感じます。この公演は大阪国際文化芸術プロジェクト（主催:大阪府・大阪市・大阪文化芸術事業実行委員会）の一環として上演されます。アンサンブル・キャストには、今の大阪の小劇場界隈で元気に活動している現役の役者さんにご出演いただいて、大きな規模の公演で、全国レベルの役者たちと共演する機会を得て経験を積んで欲しい。この公演を機に、彼らの活動の幅をどんどん拡げていって欲しいというのが狙いです。

── 最後に、大阪の演劇人、ずっと今作を待っていた後藤ひろひとファン、そして、はじめて後藤ひろひとワールドに触れる方に向けてメッセージをお願いします。

大阪から全国へ、さらに世界に発信するコンテンツとなるように、スタッフ、キャスト一丸となって取り組んでいます。そして演劇界のゴールは東京だけじゃない！という気概を若い演劇人にも持って欲しいと思っています。観客の皆さまに対しては、この演劇を見てもらえたら、必ず元気にさせます！と約束します。老婆やお姫さま、どこの時代かわからない家来たちなど、ファンタジー要素たっぷりのキャラクターも随所に織り込んでいる底抜けに楽しめるエンターテインメント性の高いお芝居になっていますのでご期待ください。

©Interview&Text／石原 卓

【PROFILE】1969年、山形県生まれ。大阪外国語大学（現大阪大学）ヒンディー語学科を中退。1987年に参加した劇団「遊気舎」では二代目座長をつとめ、すべての脚本と演出を手掛け、「関西小劇場ブームの波に乗る。1996年、惜しまれながらも「遊気舎」を退団し、元劇団そとばこまちの川下大洋と「Piper」を結成。その後の代表作に『人間風車』、『ダブリンの鐘つきカビ人間』、『MIDSUMMER CAROLガマ王子vsザリガニ魔人』や、蜷川実花監督作品の『Dinerダイナー』など映画の脚本も手掛ける。演出家、脚本家として多くの小劇場の作品に精力的に参加するかたわら、テレビ番組、イベント制作などにも活躍の場を広げる。またELVISGOTOとして海外活動も開始。2019年からは粘土活劇『やめとけ!チキンマン』を開始するなど、才能の広がりを見せている。ゴミ映画採集、昆虫採集飼育という風変わりな趣味を持ち、4カ国語を操る大阪きっての奇人演劇人であり、大阪在住の劇作家として幅広く活動する。